姫くらべ

七

比賣鑑巻之十二

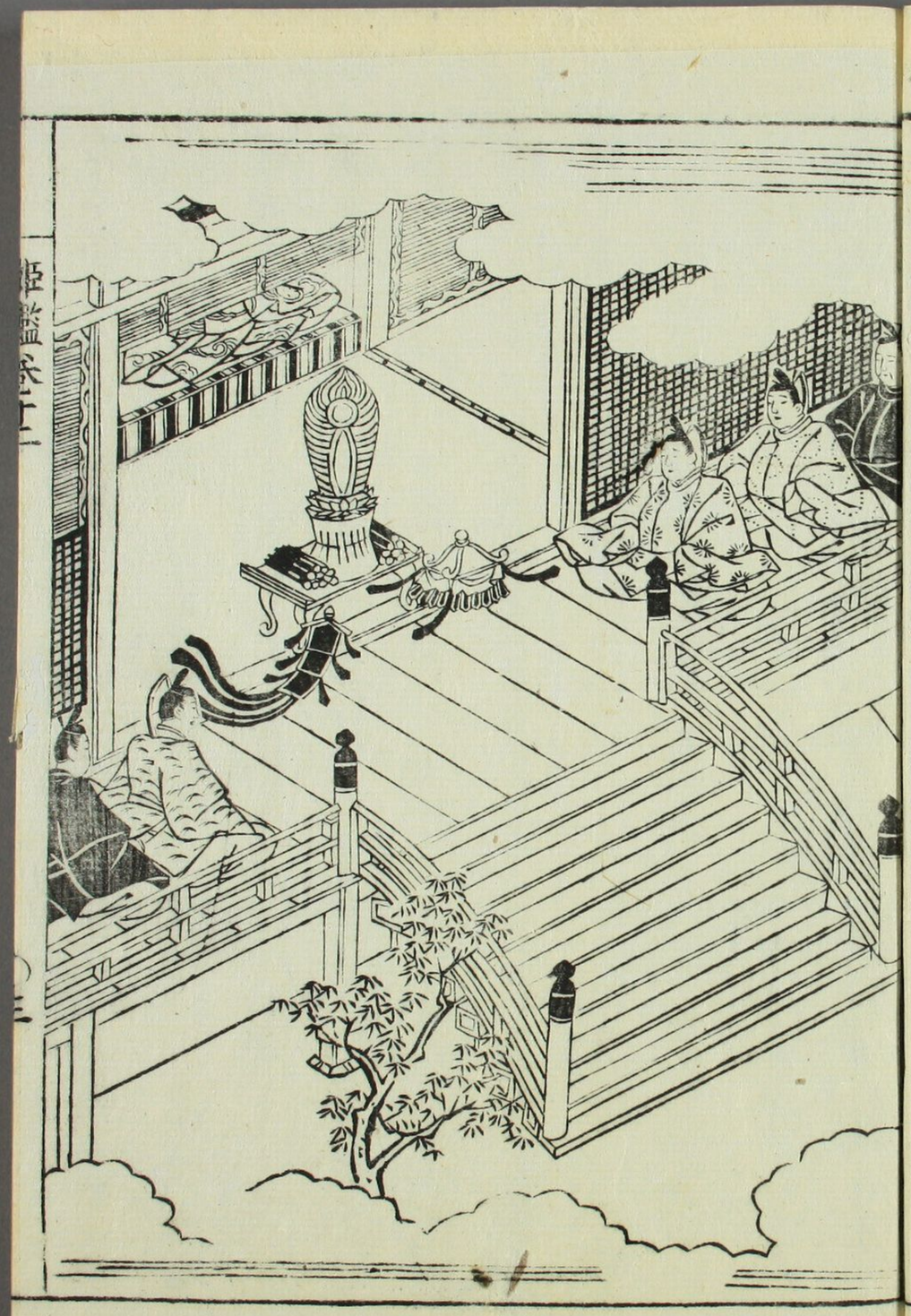
述言第十二　此巻ハ其七乃まきのすゑなり

佛乃をしへハもと西域のならはしにてはじまりしを此法
わたりてくれ法ハその一門之後漢の明帝の時にきたりて
もろこしにきたりし時の仏説ハたゞ四十二章ありしかく因果の
ことわりをのべ世のつねの道乃調にしていとかろく説ありけれ其のちの
経論ハうつしれ文章おもしろく老子列子がともがらの説をとりそへ
たとへおやなしくろかわりてこのむ者日にそひ月にそへし其
とりふなどともかろ事にありされど晋宋の比まての僧ハ
論議法説ありけるに梁の世に達磨いたりて来る

〔蔵書印〕

世孫をうでめ伝仏の御法はんをよあづけ給ひぬ
とうんく行こう河の若狭を給はりて
けうとう禄宗さうにおこるかわくふるさ仏法をも
ろへよろうるぶ出こうハ皇二十七代継体天皇の流世
よりこう樂の月ゐる達名こつりのうちうて薬師稲
月をこよ仏法をすむつぎのみこど欽明天皇の流河よ
百済ちうでめく釈迦の像ひとりなでびよ幡天王寺海
とくまろうこれみこどこうせうて稲月大臣みこど
仏法をおこうせのへとりけうと物部尾輿をこ中朝八神を
なれいみこどのおしのあべこ神八代おりもせをど

吳国の神をあがめうるへきこしこめりうれべみこどおこう
あうけうて仏像を稲月ちうひくその河内の
家をば寺こうて仏ををへどきうこうこうるめうるめうう
なりうの仏法をよ疫病こうりて死ぬる人多し尾輿名
これ神けををうこうりうくのたりなべしこりうれば
みこどこふりこおりうて仏像を難波のかりはこの河内寺
をば焼すてこうせるかつぎは元こど敏達天皇の流世の尾輿
がよ守屋大連こなり稲月こよ馬子大臣こなりるよこ仏
法をおこうせう百済こりうくの僧来りけるのへ尾法
師こおこうせう百済こりうくの時又えやこおこうるりうこうくへ



ちゐ寺屏風連中法橋海老仏法とちらとてくるとざらひ紙
やうんと賣しくれば しかどちうんべしとの法ふまうりて寺屏
雲浦と張り仏像とやうそその頃をかりけるまうく傷元
とちひうるまくりひ附るまもやうけふまりてかうけまいの
らんと新ひまうくればみどきうう先ちとううば汝一人その法
とおうるまべし紙の人まうんとまうれのあふまりてるまム
仏法とれたうつぎのみと用明天皇ハは世ちうんと
かうまくうくれさもの人寺屏ちかどの法井元頼紙屏ちの
れ仏ちたくまのうせんとるまと用明の法ま厩戸法まを
ぶりひおうりふ仏法とわぶひうふまりてまげ法海とちう

つぎに宮殿紀伊国をとゝろ〳〵殿戸なる〳〵ひよ仏の中ゝ
あらとゝろ〳〵ひく手盛とせめかろ〳〵四天王と掃清
ふてゝくゝりに仏さうりにもろこしつぎれんど宮殿
天皇はるおうゝゝ忘れそれ仏よつあきう名ばその功と
たのゝゝろびかりきまいて威とうるひろかりみど
るおと保せまくゝ所ゝうるおゝてゝゝ忘れ
うふ紙しまろ殿戸はるおうかゝゝ大仏とんおゝ我宮
人となりけるかよなゝゝれんとあゝもてれ仏ともろひに
きのみど推古天皇の代世よおゝび殿戸をおゝてゝれ
ゝり世よ聖徳太子ゝ宮殿なりゝるれをよはみどにさ

きたらくゝ多仏ゝるおしゝ多ゝゝうゝその つぎ鈴仏
乃代世よはるおゝ月姫夷姫おゝ入麻あひつゝゝて法紙
ゝり威勢いよくゝたりなゝと入麻と殿戸のみ山背ゝと
中ゝうゝりゝゝ取よゝしと紙しつゝゝ朔儀とゝくゝゝろひ
けるふゝりゝく大兄皇子中臣鎌子おどゝゝふゝりて姫夷へ
麻ゝゝゝろひぼゝ王ゝりゝゝ入姫よ代仏をつゝゝ天智
天皇ゝゝゝゝ掃よ入鹿冠のゝゝゝれりゝゝれの仏法
ゝいまゝ家ゝのゝゝゝもゝゝゝゝゝゝゝ仏古の代世よりのゝゝ
論法相をゝれ宗ゝゝゝり極武天皇の代時よ伝教法法
唐よりゝゝ天台真言の教とゝゝもゝりてゝゝとゝ代ゝ

法花宗は恵心こそとゝのへく法華経をひろむ禅宗は栄
西道元宋よりくるもあり中ごろまでは浄土
宗は恩師法然の弟子阿弥陀をたのむ念仏ばかり
なの称名よりほかなく宗旨仏すなわちこれ
恵心ゆるしてはこれ法宗ゆるしも盛よりはまく今よりおろかなり
そもそも天地のひらくはじめ古今の久しく方角のおきさ其
ゆゑ一理のうつるとも一理のうつるとも名つ
けくそ極とこれをもとのつくりごとき所の理なり
うこけば陽となる陰陽は気なり理は気
の内にあり気なれば理はなれ陰陽はなれ一気なれ

ともうごかぬ所まで二つのいきをひとつにしてうごかぬ地まひ
ものやまぬ山陰陽を二つのいきをうごかぬ動静をあらく
生育をなすを地と称をなすをもとするのうち陰陽をつくる霊
なるを天地と称をなすをもとするのうち陰陽をつくる理
二つのいきをうごかぬ地をもとするのうち地理をつくる一つ
ものなくまたくうごかぬ地をもとするのうち地理をつくる
陰陽の二気あつまるときはよせびあつまるとはこれ
ちうまれ生気のうつりうるやまびて気のうつるときは
死を有りて云なり消ちりてはるるあとうまれ生ぬる
地は分のなくしてくるあるは気あつまりて生ぬるこすでに

ちりくる気にてびやうのありまつれたとへハ火とともにのぼり
火よりつち出して地より金生ず金ハ下へながるゝかの
かたちにながるゝ物をとて水のかたちあらはるゝそのありてながるゝ
水又ちからくもやまず地にやくて木をそだてつきぬる時ハ火の
気こえくゝちからなりて又地とさしてめぐり時ハ列の火とあてたる
よの火よりはじめたる物の始終の理なり
ごとく云時ハ五行なりて火ともしハ陽あらはしく金に陰なる
中気あらく陰陽ともにさりて又陰陽のうちに五行あらはれあり
其の気天にめぐりて四時となる春ハ木夏ハ火秋ハ金冬ハ
水にして土の気ハ四時の内にまじりて五行の神ハすなはちあり

地にあらはる人の身も内に臓あり肝ハ木心
ハ火脾ハ土肺ハ金腎ハ水なりかくて神あり気ハ火血ハ
水肉ハ土毛ハ木骨ハ金なりみな身の内に性あり仁ハ木義ハ
金礼ハ火智ハ水信ハ土これ又五行の理なり万物万事
陰陽五行あらはしておちくこれにもとづかずといふことなし
りとしはなるゝ根本のかはりはなれて枝葉ハなくなるを
しそのかはりをおさむれば末ハおのづからしげりあるべし
よつての物は中にあると火とは気といひあるいハ
さまざまの神なし土ハ地の神すなはち五行の世金ハ地の
中よりくるひあるも増減あれども其のたへハみえぬなり木ハ

北のかへおひ出り給よさう人ちうはうきこいのわさ[illegible]も北を
ちうのまさう五よ又[illegible]ちりそ[illegible]そ[illegible]情の類い北をちうまま
ちう四少人よ知識宣効ありて生死乃さんさてる[illegible]業あと
ちうに[illegible]ちうび中ふも人のうとき事一ん百神の目
ぐ見しちうびなさびくちうのたまりぬもことにさ
やうかわよ北のいち四よちうぶまいせれるるやちうび
ちうく記去さいくすやうかわ之情のせちう中陽やと
らぐあひくぬまりねちのぬしりのうれいげ泥眠の名
きこ四なれもひうのよなまちう五よりわひく靈あり死
すりけよおすびて泥ハよのかりり眠ハ下よてうこ四よちうよく

五よちうちうく靈りされど出ぐよいうりすちも神眠
すわうよらびのせれどひちうれくいきく人ち四ありる
きぐ北しち神よぶく四ちうる五よ北ぜうて四ふ
四ちりちくにち人の軍神ハさちうくうさ五ち記ぬまで精
れちうくさんく投閉もちちやちぬ人ち人の中ふも
れ質いよくすち泥眠いよくさやちちうのんよちうへう
ち北の一理ちうまちうち北の徳よちうちうち四ちりりこ
百神の明ちの理ちおちうくあちうちうちうくうぐ北ちの
くちの別ちたうふるりうれちの徳天性をちりて神明を
ちくやちう色ちび性をちくちちうちうくまちう性をちくちちうれハ

世をおさめ民をすくひて人物をうかべたもふの形
うんぬんの性をはぐくみ云々学問の理をきはめん
さらにくしの力をもきわめて徳を成ひ性をはぐくみ
さてその人こそ万物の大備の名あり人倫日用の
その中をはげむ心学実践者の天生記の教百物の
ふかりてめざりのうるおく自然の理なり所をふか
天命をうけ中をたく いさぎよう
すべんかしまこのんとそ天地の物をもをるをこのめ
徳をすぐれたるひと人物をあらはし道をすぐるにのり
人天地の物をもをる法をうけ

つくさどるの法式中庸すなわち天徳をうけ
ありてその道をきわめ知をはぐくみ
すべかちんの徳をもて天地をうるのみもすべく化育
のみちをしるなりそもく本性の一理ありとそ
思ひ出しさに学なりりたるく物のいとひとりくそ
の学の理をうるもあるはうる理の変化なり物を人
をもて天地をくつもあるぬとくふるをおさめるに
ありてやがて正しき学の理をうるなりうる理を格物とふ
物をうるその中庸なりすべく物をもたぐ理五一理の
うるつくそその物理をもきわめ人倫をうるの

を極めなお本の常理乃すぐれたる儒者のごとく天
ひさかくのごとくその乃たいらふ可くあるべきふひろ所
まことを仏ものの方古をあつく一人もあやまりなまるゝ利禄
名聞乃たのしみふまるべきものくるべきなりとゝろ
とゝろ和尚乃のこゝろあらぬこゝろ
仏の乃法海のごとく正法眼蔵ぐれ法門ばかりをかぎりなくも天や
うにうりかうてめうわうが儒の乃とこみらるゝ同しかしば
ゝくおろかなるのすがたよりくわとをしらず一切万様の理をき
こゝろとゝろせ乃ものの間よりけんをおりうくがごのものを皆方
法ゝしてゝ云ゝとゝあぐさび常と言ゝ人のうちかさゆゝう

虚空若無すべくこれ法ゝるり陽の化育とゝ
て天地万物とゝそかゝちあるゝ物へらか虚空の間よ地水火
風の四大よりにゝりあひてゝ物ゝ有ゆまがゝるのごとく
て空の神なきゝ物とゝゝりて世よ神怪のものあるとゝゝく是
神のくぐひゝちなくゝして〇ふゝゝりゝ人の神徳もゝち
かつゝびてあるべくかゝちゝものゝとて神徳ゝ三世の源
猶ゝて因果ありゝて是よ地獄畜生餓鬼阿羅人天乃六
とゝゝるのが十方世界のひろくゝ三世因果ゝ生きゝとゝく事ゝ
世量無ゝ尽なり儒ゝゝ云ゝ天地の理なるゆゝ
云ゝしく空ゝりゝ之ゝ法陽の元質ゝ在ゝゝて空ゝ

仏法なきをあはれとおもふ心なりとも云もとかゝるべし
その人を悔とるゝ理のよつて所縁のよつて神識の
ゝ魂魄ゝゝの霊なり識ハ識ん所なり山神識服耳
眼耳鼻舌身意の六根よつて通聲香味觸法の六塵に
もし所ハ輪廻生死とつまてもまぬうるべし知念猶知てむ
るすゝ神識と称りみがき欲ゝきゝびゝて自性のあり
ん内心かゝうて一物りかゝを性と云儒の性ハ理なりゝの
性ハ心なりつゝるゝゝを性とゝるゝもゝゝひくゝゝるゝゝ
ふなりてゝびゝりて性とゝんゝくふゝハするゝゝ神も仏ゝ
成く幻魂の生死よかゝゝびゝ世法仏と性とりゝて夢仏

ふ滅安楽自在なり一切法ゝと神とゝるゝゝて法界証
性とゝあゝ称くすゝゝ命一人儒のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝに親ゝあい一世のちかゝゝゝ我ハいゝ世ゝゝゝゝゝゝ
ひてゝび成仏ゝゝれゝ世ゝゝの父母ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝりの恭ハゝゝゝたゝゝゝ人ゝを除ゝゝゝゝゝゝゝ
て無縁よりゝゝゝれゝゝゝ生死のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ儒
仏のゝゝ人のゝゝゝゝゝゝ育れまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仏氏ゝゝれゝ老ゝと美養の化ゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
万法の内ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ儒

まてんとおさめ道まて為とわるさめ儒ようく世とおさむるとらハ
事あるまてどうれもんのかハ仏ようこうさたるものく流みく
主儒のこうこにわるさる事いなるけー
仏のおとを天地の中ありこうこいあるぬなり天地の中と云
うりうこれ洛陽ようぐ日のかみとを云心辰たるさるこ十六
度あるの日四十刻なの日六十刻なの日ちかさるかみ
どなあるくしてやの洲ゑるーうを放よ中土とこうこうより
ゆへのうけいよくさるくしてあをひのあけいよくくた
ぐひおりこうまうより南へ知うけいいよくあるくして月のた
ぐひいよくすくるーうふかやよりこうぐうりかり中土の人ハを

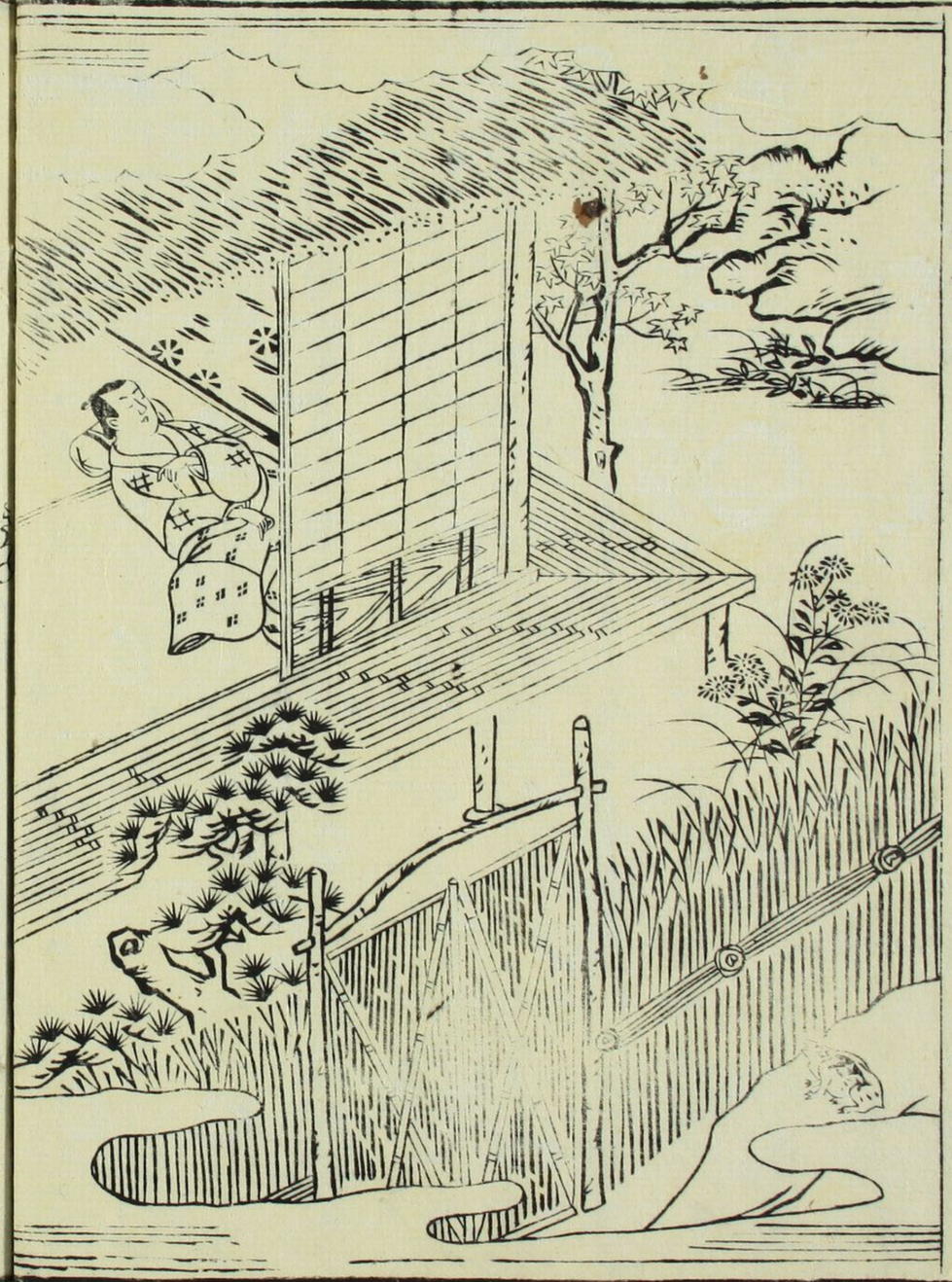
たいうふかやうこうぐやうれかをうこうびとうくこうりうるうく
仏のこうおうちかりを民いんをこうこうもうひてそのおひとざ
あかるくせづるるるおりー歌迦のりうの心と天竺こうりう
う流沙の西葱嶺事ふの西ふあるりこのおをむのの
たるようくくしてつひようつくんふすあるーうてうりるーのの
ここハ繋ぐこうりてまの化をでうまをせみくう林とうるかいうひよ
絡をくるりとりうこうれ書ようんてこうりうこのの化方ぬあき人
まうぐうくくしへ流りまるるものもこうゆうくぬぐくものこうぐう
為よぬのまくひうこうハ今の仏縁ようくふうりくくくくくそれ
こけのこうこうち歌迦こそこうあるこうめ一切の仏まい羅こうるるこに

て作りいづせる有りしかるそのあたりのかくちなり地獄の
業相十王地天などいりこの世の人あるべきやうあり
つくるその時の仏像なり東又羅刹ならんかとも思ひたに
てそのうちにおそろしきあり是をいふ鬼とぞこれよりかくれ
ありの人いとせの宰よりまさりやこうもぞくるかどもうのあ
の刑法なりやうやひめぐひ年久しく世よりつくりていまる
とうの人多く法よりはなれたるもの紀よりてよ
こぐうのおかうりしうどう一人も閻王廳とうの人
いまごうひきあるなる鬼のゆめるふもんうなりわ法より
のうらの四本ともくるまでいよくさわりて人のふ

よそこ人のうるべくあるの間まで紀れぬるうまう
りあるよ人の伝作いよくうるうなり
法よのいつくしわたひくわるすくく美なりとうへ
どもあやふりうりて疫と出まで有りとりふうとうふくく
ひは大よ美なりとのくどと法としなり法陽の西にまに
なりとそそ世のつぼあるぬるのうるひとりたくて
人のたくうぬるは疾病よりうされ亦命よ法どうまてあ
有よすこれるうもうれ西の怪なり我人とうあうくと
とん法陽の西理よりづあるなるゆうとあるうるなる
どもうう法とうて怪よりあるつなりうぬ業

なりといへども死の理はたがいうんおうの理にたがはず氣のうんびしてあらびて死
もしくは小感ずるゆへあり小感ずるゆへあらびされば一理
のあらびしさればうんびなくしてあらびなくしてうんびなく
たるものあまねくその中に理まさにうんびなくしてあらびなくして
まさにうんびなくしてあらびなくしてうんびなくしてあらびなく
たるものあまねくその中に理まさにうんびなくしてあらびなくして
あらびなくしてうんびなくしてあらびなくしてうんびなくしてあらびなく
たるものあまねくその中に理まさにうんびなくしてあらびなくして
あらびなくしてうんびなくしてあらびなくしてうんびなくしてあらびなく
えらびなく禍福生死は天よりまうする所なるべくして

なりといへども死の理はたがいうんおうの理にたがはず氣のうんびしてあらびて死
ようへ考かわることたがさいの中をるゆへ変なりさればそのの
ひさくにはくいさるひをさそどもあるさらたちくのがり
ゆくがくし理はかひとりひわくこの門のるゆへ氣の
感應よりまどまの死れたりうえくこずるゆへ
知るるものやしからぬまへゆくまでつひにんるなるあるよ
人あやしまびまはなとかあり色死の六業さしてくこ
かかるれどもつのるなりりあり面緩のう りく豆義
なりをまるり血よりくふるるどこかりるくつひを
あしびされどこかせるあるあのうちなりうるこれを



れのひろさにとんでて孤のゆくへもしれず
人死してなきゆるすやうにとこそ人のつぐ物のようにくるべ
らく靈をなぐさめるのあまでこそ入ってきねんごとをゆるなりろ
うたあるる官人の妻ゆるちくるがてきるとおることなりけるた
ねどもてゆるのさぐあどいとかるれば妻の靈めつるひ其女
よつてくく冥途のくるしさ限なくかるれかるひ
けるゆる妻は死しるあるにあるぞあるる魚とりおることのあるか
がれくとんくあるとけるりその家とたるのておるるへし
きりみるひきりは法師ゆるりは和尚入りくるりてび漢ゆる
の給ひれ冥の内にもあるうづきりは行やよのへてもふるれ

すひとつもさくいか祢ぎど神やまどうかるに門をたゝきてはいのらう
へさしあとふ事あわれだにそよしかがひさくあらそふ事とひよ
らひろく人へんとなることやりいて悪あけくねよかんされば蟇ぞ
となりひとつの猫はおとびらんぞなとけるところは死霊と云猫は大
ゆう人のせぐへかんやわかの妖気をまそよつさくあらうのなきこ人
の幽魂をいてしまいたり又人はじめ往くさ訖よ云ふところ人の事
ものとのあるはさんの人ひまいろまつるよあらばあづさの弓
ふるくよ頭はたまきく人のこゝろよあらび又人はさるかう男女のいか
あらそう人要で虎とかるそうびあわりされ厭魅の理り
りれかりあし又至誠の感応とる貴人るものさげしと人

よりてゆくもんなど云ありし聖賢よおもらざれとみなあかりさよむかし
加持かるものさざしとのつらうわくおるひよういひ出るもさ
霊験をそうへわくてまたそのまゝ文法術よよりててん和からう
事あり人のこゝろをさぐりよる事あわ術よ恐あわ仙術あわ
符とうさまじなひまぞひろがひるわ幻術あわ力とのゝ史とも
くさぐひるわ妖術あわ魔法蠱毒の邪と云戯術あらう
法との業みとかくたまてもするよ巫祝僧尼のそらうへ事
その人はどうとなあよ術とうり用ゐるもあわりうる事など乙
ろぐくしき我よりひ法くさまぞひつひてを理りわさうう
なりされ人は惑ひくせぜりしくうくひるのもまくいおのづで云

ちかき理とおもへるも中〳〵理とまことにへだゝれり象の揚雲胡
氏崇正辯といふ書その大むねをいはく崇正辯ハ何のた
めにして作れるぞ仏氏の邪説をやぶらんとなり何のたゞを
ひがそれざるゆゑのみにしなんぞやされど邪にしてその親を親
とせずして師僧をたふとび慈父とせずその君を君とせずして
夷狄とおもひて法をたふとぶその妻を妻とせずして世をすてゝ事を
つとめずとひとへに三綱を淪ぶるなり父母をかへりみるゝわくみて
よくなりハ人のあはれをいはずゆゑわりとすべからず軒をそ
こゝろひとくしざるハ義のゆゑにくるしみ人のためにそむきて
竊みとおもひとひらハ我のゆづりおよそ我よ同じき君を賤

なりとて我よこゝろの君を背なりとするハ智の是非なり
是四端をたてゝわが三綱の端をしへる人倫のよわくなれり正道わ
夷狄ハものみそへむさぼる欲ことをしへなくおもくなわ釈氏
のきとするひすてゝきたのいくりと法をしらべからんぞ邪くい
もちいんやてものゝもしわからん人ハ生死をなるべハわしへなわ
つゝおりことわかなしも酒くおわりておのむをこ正しき人の死
死て後の罪さわるハかなしむるゝわくおゆきさるゝ後かが
うれさぐひとん寡思無のこともバざるすまわり人の心を清くせ
べきよ現在よ何ぞその純てしまそうろうなくお後生をとく
人ハ天地ようざまろをべれはたゞよ世界の外をとく父母妻

みな人慈悲ふかくてよも虎狼蛇虺の名をなすひとすくなく
万劫なりとも常住の生をあくまでのちにおもはれ給く
とうそうがなるがごとくそれ中国の人文と君くとなりて
まゝ聖賢のみちを見てもその清るをまもりてうまをつるは詭
郷党のあはれむかしいまある墨氏の道ゆきしく
あまさへのつくりごとかへまつりを見せざるもあざむかふるがゆへにて人
まくこれとわかきそのよわく来まつる故ニ門あきらかにし
つまへ法ぶひ二つまへおそれ三つにむさぼりなり理よろしく
あらく法ぶくへの業すへうき世界のかぎりなく生死のさかまり
かなさにそうそくれとゆふうとへあふくおそれおかさ

然のへうき報恩なりすへやうに地獄のやみにさすとえらく見
とおもひまづきせまつうまくへよかりもの孫の末ともと教
のよへうき天堂極楽の善福をとくさく見をいづるの
儒者よく理をとかへめぐく智とあり気をかうひく勇をそ
仁よ義くうきつうかなひまことにそのつて武ニ門のさうなし志
とうかつ賢智のすぐさぞう人の文世俗の善をとれうき人ゐるれ
わさしかきもつてそうつく我の愚人のもそれむさぼりをす
まさへりの平等清浄一義くへの一をとしめくもへをさとりぬ
まくおそれざりき堯舜禹湯文武の徳天下のあまね
ひ仲尼子思孟軻のたぐひはせよてまうりそして面々

君子行ふ所をこそ河内人と方物とこれそのさいこうのゆゑ
なるべきをしく河内人と方物とをみかたのごとくおもへ
ば一人よいでこるこの君ごとくめづらさるものかのごとし
ふるれどいまごとくばかりいづれ穀をも物あくまでらびこ
泰山を物のごとくめづるがごとしこれ聖人の道をまなびて
ものごと方物の理をいまごとくふかくこれ人をうべきさ
るべひとのごとくるまたりくるのちるかの況よりもこと
ちをもの物のおのづからなり所をすべ
ちいくれ遠いまごとくごとくの方物をとれいこまとあらせり仏
をもをもの物をとれ遠いまごとくあらまりとくその

ふるくまこれひとりなりときれどそのふるくまこれ
あるとその物のうりわるんやすでに世を衰どろ河内人世をお
ふるあるんやとおるに儒とれくいまく用どうるるりそれ
ば用どかくればあひくあるよとうまびれるうく儒のくあ
るとうるおるおるに儒ハやをもすまびれのくあるはりくれを
まびるやかくりづくなるいるよそや 仲尼の文の君臣の仁義
るを載とおるもるるまのけいるいんあるんやぐ自然のまくあく
況こをざるかるいえるを夫のあるびてなく況のつも
まびてあつく日月のれるるうどてあるうるるうどく
しるを理をるるうびて維為するけいえあり所をその

紀乃のかよひいでそのはんれかにとびこまり墨氏が墨
書をうらふるごとのすぐれたる紙たゆふすハ
なりれのすぐれたるをいてうる墨をうるとてのうらひ　さあ
て倉歌よあぐつわうらに為ごづ〳〵をかく〳〵天下の人
をひきまつごづつるやその源流のとうがわかの育余をとく
人のこゝろをとるひ人の心をとゝ水ひとめびをわうう
〳〵ゝ祝まざるにいうるのまでけいえくのこよあゝんの鄭
の武帝の行をたうとゝうるひあ〳〵いまるのたぐひ多くれど
選ばとりのこぶれりあやこはるかうそひきあひ親〳〵あひ
く為の仏記ろうもそびうり夏墨うすきうゆかくれどやく

なるいこまそのたうあ〳〵ぬるいうゝ〳〵仏のんとゝみちび
きて若をまうひつゝとおそれ〳〵しむ世よたをけなれるよあらびまう
ふるうるとまをひ〳〵あるこのうるうるやこうゝ〳〵くいうく若ゝら
あるうるをとゝ文なく考るるをそ〳〵い若なりやあるりやたゝ
きゝ人のうすふまこうゝ路なりわ不仁不義のうちこまふまこぶ
ひくゆうまんやゝこのあゝこじとうるびく事よたぐさし
ざういのやまうわうゝ人ゝいうく主家〳〵て父母の口神を
やゝなゝいその若すゝこるわ主家〳〵て父母をすくひ天雲に
のがるいその若おかひるわ者ゝゝ〳〵仏ゝ大若ゝわゝるや
うゝ〳〵くいゝく良仰ゝ文をうゝ世ゝ羊尾の文をのぐまうゝ

よるひるくるのうれなわ又ともてゐよりうぐまてくそのふをた
ちしめそのあかつやとそうふじさ巻とあるうびそのあぐまと又のち
またにさすへ人はあうとまおうまてくうへ死ぬうとそうへりうぐう
ちていこまうわらんせのたあいさうびたの世れ我のんよへぬさしく
大ふ巻と云能なりいこんや三ハ仏こうるそのそへよさてうひく又
りのく来ふなくらそのはとはてうつうへのこのあしんやそのらも
ぐしの世よたてう日あしんやへとのつうりたよりまう寂よおらへ
こしとうびして死尾のそり不良四のたり金帛のかどう衣食
のゆうるひそうけ恭能こうやもしうけく民のなりうひと倦りと
まとうう美備能はといこひたは仏といこんや仏のたうこしゆゆまび

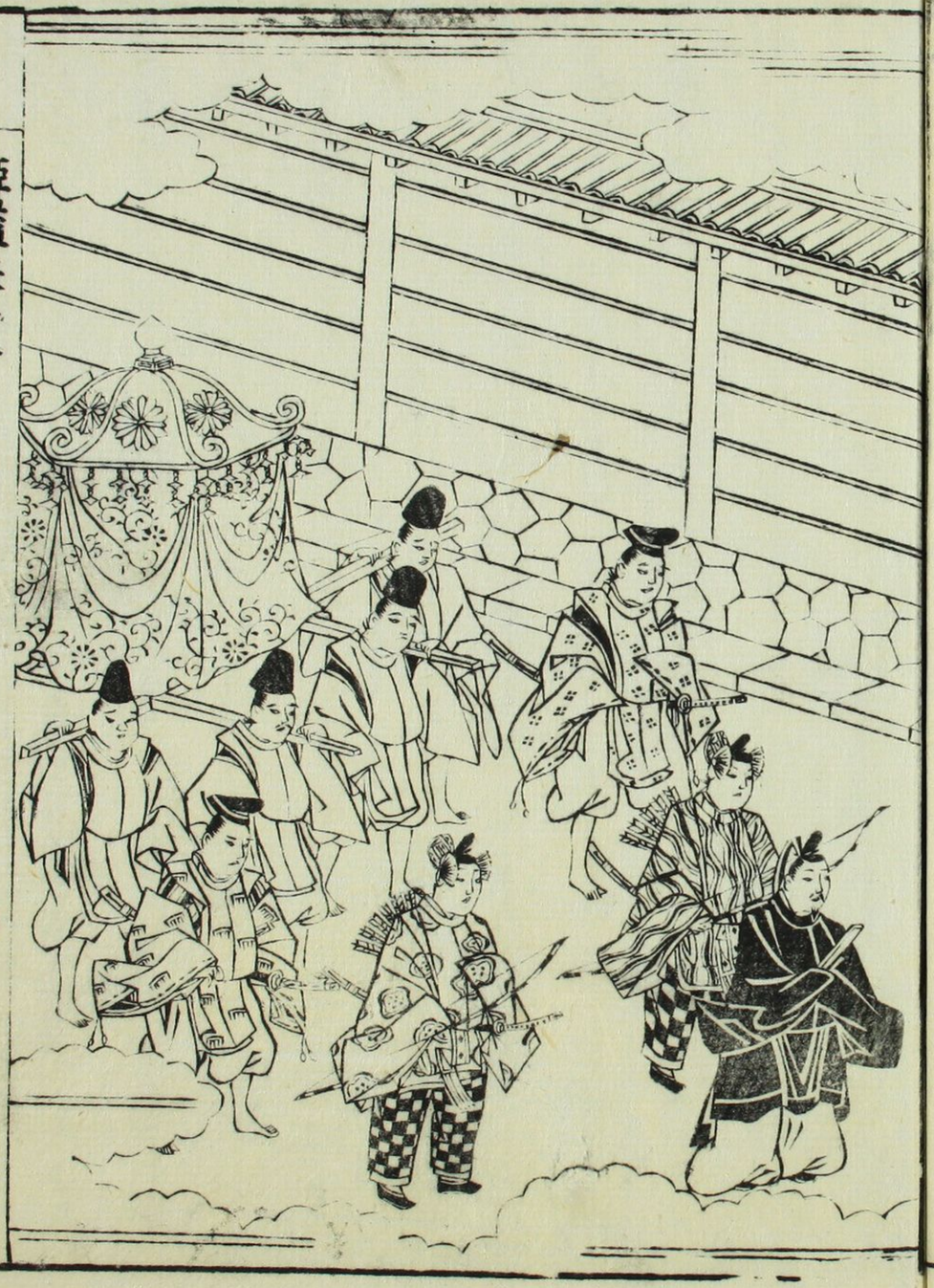
仲尼のたたぐし邪ものふうれなしべえべさまてうりるしこうれ
蓋忘雑のやひこをえひて他まうる友なりしぐさ家の序淺羅
泥原梵とはこりく央業といましめけるあしまひたくそれへ
りるの新よはふまつるゆまうる附なるりあり死せる附の
こうあるりあり蓋のいこくまりこうるまづこうるゆまう
りのふく蓋ひこをうるなしし死せうまふ仏く礼をするる可　こ
人のせうよまうりあよくぐこづしあうこうはやこくたれ
うこんとりしうのこまはこんや又無いなる附へうこうを行はて
ゆしなひ死せうはふ礼をそうるくく蓋うこうりりありこ赤
なり仏のこうへこうこうりの又無れいるうこ蓋びしてみこまと

ときは死せるに礼なくて文王を申さだむるものにあらずして又
これをきく列女ハこれを人とやいはん孔子の代のまり〳〵今の世なれば
もの〳〵これなくて素をまもるなりてしかしまでもさかしく書きし
あり殺せば所のためにてうとんやよもそれらく中る人のすかと
かくしされしもいまだ誉しするはこれ又あるゆゑにや〳〵と
あるべしすでにようやまうぞ文風かよびしは文らくよらびをいへされば
ところぞや書きのいとくしおりをうつしも孝をもて河の氏の法
あつきは論もなし葬祭の礼しもそらくば死せるよそむきしせるといへ
されどそのあかりをみなもてゆぶ世にてる帷十七ぞろいを萬と
かづくんめでてあへ中ぶまでてる蓋もそでぞるハ稍そうづまんぞたゆなる

孔子またつくてさぬがさかし後くろの稍の死けり時にも彦とを
そくくらづまぬのひたり聖人の仁愛太るまでもその心をかく
せりいらんや文王と鞠つり母とれを育めりとるをえりていさぎ
らうんとて礼定中のともうくりなくしその死によも河ハ中すあれ
あけく境をて文徴登けてあまあかしゆり御りことざるをともかれ也
なりこまと大るとおりんまでもとよびさうのまとしそれ失葬ハさびきの
まなしひるりけし三代まらつとと悪逆およびる君そのころをとて中く
まあり浸淫してからをゆうすて人類をといせと哀せり未れ
代よその成をあらんと哀俗よあらずひく悪逆の刑とぞなる親
あけどこせりいとぞしうらも喪礼の稽とてぐらまなれのせ門おに

乃祖祢とまうりおろしなどもあるとぞ
祝言してはよゆくとて祢宜のやもろべらいとまいらしばと
いとあるべきうに斧とゆくあるひ門さきうとゆく人を
やくいたまーぬとてこまーむ祢宜やもんずるんいぶくまうあるか
のかりえうろ時ぬとぐけ酒ゐるぐまてくすぐりの盃けもぐま
まりうわくかまりおさてうづくまれるもあうんまさるけ
だぬもみうよあへぐんるゆうと巻ゐ物語ろうーこまとすうゆ
なんぐよとうとて盃とうあもうも、かつけう新よあまさぐうてくあく
うあうよてあげうとうとゆーくうとうとうびあうりこれ天
巻ようーくのぐまうとありとうあるまこにうまうるれまびい

ふさあの八位事よ伏ぐうかのたーうとりうさあるんるあらびや
けうもんう張湯よなづうとうーぶうるよあるーうそ屋くうありけゆく
む世うよあ うあおうろく法とをうとうとてくいまうーうれうーうし新つゆ
なり内張法道ぐ蘭巻よいうくく秋氏ぐ大化の狩りうらのを
ゆくうのあ年うみうりあのうさ法ゆいかいけぐまのり目おべうさか
うーてうに日とゆ祢ぐーてとりおうさあ月もゆぐ人ぐうにうまとうや
くうのうさゆーー巻の夏文弗忌いうちあぐーて巻れうはんまうー
うぐうひよありうーうあいうその猿猴のやあうるゆとうりあ長ゆ
うり建ぐうーてうけうよ麻ーうあ人ゆうり巻の目るゆ朝その陣
とやうんといひうれば今平五西うまとぐあううさ北よ長ぐうく



ひ〜時人おうく山ゐすて死ぬ楚人のあやち〜かゝのりゐそのゆ中よあゝんぐゝもにゆけるんゝといゝゝそ衛公その左流師をゐ〜ぐ墓どあぐゝたく平莊のおうふゆゝゝり無のつくりの祢ハ帥墨の城とゝあけつ時人の墓〜とりゝくがゝゐとゆく祢人こ也とんく須とるゞいゝくいゝゝあうんナ僑せり渓の生莽焚ぬれ列つゝとく疎良省とやゝゝうゝせり古人ゝゞゐやくるゆとゞあれゝゝちゝあゝとゝゆゝゆかくのゝゞゞくあり引あゞいゝく楚の南ゐ冬天のゆゆゝり親厩死ゝうゝ時ハそのちゝむ〜と倣してすく場よそのゆ貴ゝゝゝゞじ奏ゐの西ゐ儀渠のゐわり親厩死ゝすり時ハ無ゝうゝゝてこゝ直ゝゆくゝその結ゝんくゝれと登遐といゐゝそのちゐ巷あゝ

よげるくなれ上ら主を敬しかしこまことおもうしとする時ハうれ
るすもうてもおやしとぶにありひにそのうらいまで火化のこと多う
あらつる所よ儀渠がむかしと同くてやうくおもはしくおもりへつまこをねと
そつり椀するに葬サとハ蔵しとふあそうくとるすとバそうしつあうへ人
志める時ハ野よおくりくふうハ葬とおくつおやくつり黄帝の尭舜
よりこのく棺よいまてもつひに三代よつよくかすとおかんどてふの
をまをかさ○棺くみまりておりさ棺よう多しぬかりみまハ槨
とあらしむ地のうらうしきと見さたぶくうれとおさむひも多しさ
かくれとのづくし濟までちよ浸うくるみらうと浸くおりふて
うりるす終くまでしとぶ子父母の身よ傷ふまつる蓄の枝

アよゑ六一本事これわらの中よ物とさ安情をふうくして
身をやどろまで悔多しくんすと乳つりたり西域の葬水火
土林の四あり水葬ハかど○と魚鱉よひ林葬ハ鳥獣よ
ふしるあり火葬ハうぐ○とやきて灰とどろしあけするを
あり又鳥葬とハ鳥をよはせしむるとくらそぶ○づりみしくそう
ふうたわ水葬とも○とそりておさむるわとまるへうぐ○をを
つるすハうかん仏おわり出さる事しみてこわきこれの色びとさま
うぐ○とそけくおとそさわねさうらいぶそのちくくふうらめる
りさぐ外まハ土葬火葬の外世ぼ沈ぬるなれバ蓄の多まを
とも父母のうげ○をけぐうりれ抱そもさみするハえんせいへ棺乃

けふこそは画師(ぐわし)のやまわく無(む)知(ち)なるわまべその悪(あく)をなさけ
なく无ゆかとうしみくゐするさうかむかれも故(ゆゑ)あるりてかくりくし火
よの人はゆ見しらけてふとせん良心(りやうしん)の徒(と)かうじむさうかよあかれ
さる方(かた)よハくつまもれも酒(さけ)しのあしゆをアれそそくうくよ
らおりれしけれと悔(くや)さうわくかんしねかわ舌(した)蠍(つゝみ)じのあくぢまうさ
ふぢとくに大(だい)くえのかしくれ内(うち)よ共(とも)よそ法(のり)めこしかられゆをと
たくしそ家(いへ)もし叔(をぢ)るぬくくをぢふそてゐやあぐづくせるうとあきハ常(つね)ハ
こなこれもめつてなくふるすとむ〇しつるとつんとくわちろに
文武(ぶんぶ)天皇(てんわう)の御時(とき)元興(ぐわんごう)寺の道眼(だうげん)より火葬(くわさう)と云ことはじまりしく持統(ぢとう)帝(てい)
上の御(み)かうそれも故(?)るの尸(かばね)を焼(やか)するしなりしとわこのうへ

綱(つな)ふおくは事かわくそとふかうく病(やまひ)よ見(み)捨(すて)せうひぐくしされど
ざ偽(いつは)の火葬(くわさう)よハいつまもしこるゆもあかしすぞてよ先(さき)をうけくあく
つきらへるわくねハやさくど鉄(くろがね)のかうすてかげ〇をほしと
しくもくあづてせりしとゆく隆(さかり)さあぐおとぶり火まよしまや
ころふかりうるうづ〇とぬえしおて武士(もののふ)のかくふなめよ責(せめ)をる
まもれをしるん生(いき)しバづくに切(きり)くごうれく清(せい)室(しつ)の刑(けい)のごく
くなるへし世(よ)のたまきてもるの毛(け)つすごちとくおそろくくて面(おもて)
しきれども刑(けい)よ似(に)くうりえ時(とき)へ焚(ぶん)棄(き)の刑(けい)ハれおりほくる
苗(なへ)しどくまかまくるゆゆへよあゆもねくなそてまのとあしじ
縁(えん)よ郁(うら)しそへのむおりしいまぞひゆてるかぞろ内(うち)よやけつが火

よあひえてうみうへりおこさあげるものあるをばやらうどうちた
ちてあるひとものこそとうそ小鍬大鍬うまびこ日よつうり
てはひにさらおこさあへうくりうしがつるのあるんとうのびを
なりひにまこあるんへいりうどに天毋とうせうた大羅よもち
へうまとあうべうれどはうくまうしびべいけうしまをべ

比賣鑑巻第十二

右比賣鑑述言十二巻畢之此次紀行十九巻板行出来
次第可令流布候

寶永六龍集己丑載孟春穀旦

江都日本橋南壹丁目　須原茂兵衛藏版

比賣鑑紀行巻第一

目録

周太任　列女傳　附邑姜　同
鄒孟母　同上
田稷母　同上　附崔玄暐母　唐書
陶侃母　世説新話
魏滉母　古今列女傳
張奎母　五倫書
皇甫溢叔母　同上
陳元治母　古今列女傳
鄭吾果母　古今列女傳

比賣鑑紀行巻第二

目録

柳仲郢母　温公家範
妻郭袁母　拾遺孫餘
二程子母　伊川文集
尹和靖母　増補列女傳
曹太家　後漢書　附　陳遵妻　増補列女傳
惠心僧都母　發心集
荷然尼母　元亨尺書
證空母　同上
小條時頼母　徒然草
楠正行母　太平記
清水左衛門尉母

比賣鑑巻之二

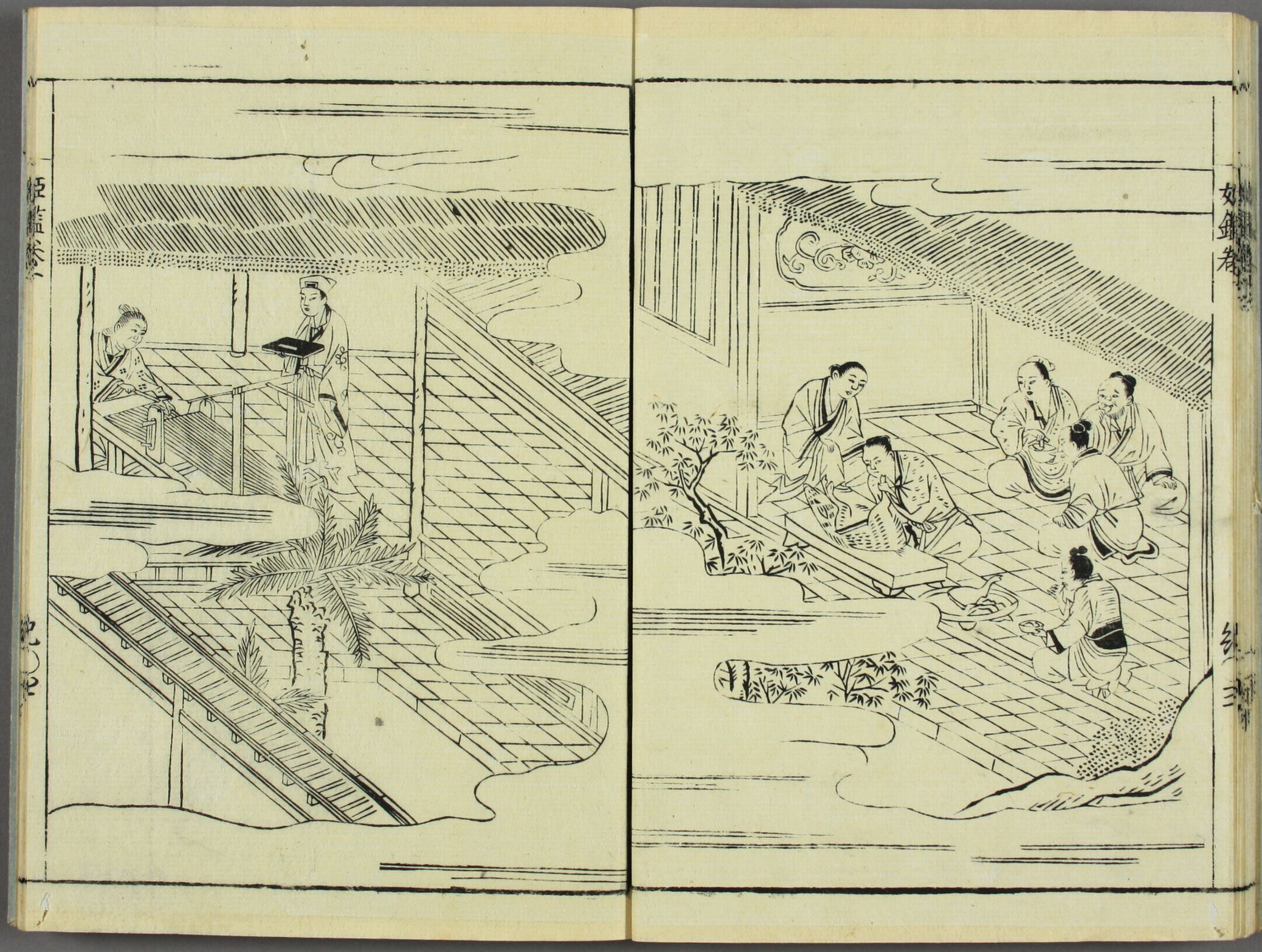
紀行第二

此巻ものの人の母にておはせしかとも、ものの物ことをとりすかりしかの小学の教の事ども、なへてのものとなどもなへり

いにしへ周の宣王の妃女王の母なりしかは、あさましくもあるかなとてまゐりあつまりつつ、ひとりとなりの女性のあさましきものの文をかきあつめ、ものよみ、ものくしの時、胎教とかくこと、まやうにおろかもまさりしかは、文王生給ひしの徳をもれハ

らせ給ふ左任一事をなしへかよつきて百事をてらしてけるより
又へ世のちきにのよ仁政をなしとひ王たとへおこし天よ命ぜられ
人よいてうけとく周家八百年の祖宗となしせまひぬじしと
なふるひあかめ王ろ世のためしなり文武王の后邑姜と申せしは
太公のむすめ成王乃母ぞことおりこれかも胎教をつとめさせ
給ひしゆゑ成王も賢徳そなはりてせたまへり
いよし孟母といひけるは鄒の孟子の母なり孟子いとけなかりしより
父なくして母よやしなはれけるそのすめる家ちかくはかありしに
中へ孟子のいはけなきあそびよなきとへを送りて泣くるし葬の
まねをしけれハ母やがくはよへりて孟子をそだてがたし市に

ぞといひくあらさりて市のほとりよすむ孟子又あきうどのま
ねをしてあそびけれハ母なげきてやどりけるにかはりて文学院の
かたはらにうつりけれバ孟子それより学生の習礼をまなびて礼容
をつくし威儀進退をまなびけれバ母よろこびて是ぞ子の住むべき
ところなりとてその所にすみけるとぞ東家の精の庵
丁寧にかけると孟子なんにあきたらずしてかへりけるとき母
ぬくくろみ是こなんぢよあきさせんなよぞにこそへいけるる悔
ておりつくおれの婦人は乃ちゝめよ胎教してはじめんぬさ終よ
早もそのたのきてにいさきれはかむまてくは智恵
づきあんすゝまそひくわしなることひきさらし川あさし



くいつるとをもふよりそのあるまてをもうふ松のもく
ひとをうくるまよりあくにんりうくさやうくもたくくるりて入
学して過ぎくりわるる日その教よりくれバ母おりより機と
おりてゐるうりもあひくる学問すめりおとうとよさやうるる
といつわ母うふるをりてそのるわ物をうさうる盃おちどるきて
あるとうに母にいくるもんぢ学問よりちをうてをうまバかくぬをと
そまを君よ八学ばびてみとるしゆくく知とものひとりてあつひよや
うくしてをうどうにるとなんぢ学問とるをるなくハ物よハちか
くぢりハよさしつうるくぢりてをまをうをうをうをあるぢ
はるうるれ中たてをするうにしるあるあるくんや女のをさるあ

かうしてをうまバ君をやしおりんなるおのこれ徒とちさむるよれ
くるるハのちいうでくるる者をくるるるくんをぬをくるるびハ奴をか
ひをうるるるかるるるびしと盃よおをしくをしくるる学ををあて
やまびれをのひまどる思を作としてるるを大儒をるりをををその
うるるるどうはまりをなの世をりををりを盃を妻をりてあるる附
園をいんををて妻のるるぬぎてゐるををんくるるしをひてるる
まをるる物やをいびるあをるるるる盃母をいをまを代るひくいるくぬ
しにるるまるる女ハ妻をるるびてを家なるる女ハ者をるるりて人の教
まやどるるびるびをく文母をるくさををるくハよしく母るれををを盃ををを
びくいるるをまを門をいんををたるををみるやしをるハるやまひをい

たさんとなり亭主のがてんして必ハぜひとりすゑハ人をはごくみ
とかれ老よつんとして必下とらハ人のおやゆるしを得てならぬ
ことかうよ礼ともりかゝげて人の無礼をせしられ候よそむけりに
あへどやと盃よてとりふおもうるおやゆるよそはへてつるよ
その妻をとめをそまりそれち斉乃要よつくへく母くりふすめ
里おやよ盃よ何とかくそゝまりにげよおもなげきてる母にあり
ゆかく乃をもふらへていまく云ひよハ弟をむりてくゝめよつき禄
とりやしくもうをび君から乃をもちひざればその朝廷をも治めぐ
るなりハきびのよりちひきまび禄をうけよくさうへしさればも母
の年老くなさすへあるハがんつきれバの孫なりと母ぐとて老人

のれハ酒会とて時へ衣装をぬぎよりかのゆるし妻にしさゆ
まへりして河ちごかのためかま年より終りごとに父母に
志たがひあく嫁をれバ夫よ志たがひ夫死をれバ子よ志たがふ是れ之
いふそれかの名へおり我の夫若きりそれは其道の我ともふ姫よ
まにとこな人我ハたゞきり礼をゆりんさハんまうくるかなるかれ
とあんなれはおもあるはもとへまあおもまであれとおかれをあひとく
なれバもよ志たがふめかくの人の母ふ乃たを乃そりてとり
やもめとしてそのそばさんさめよいゑをとてびつをりさとてはさ
たうくりつくめみりまもいつりあゝせざるのそへいを如かさ
ふくざしのすめるれよまひるづれるいやんゝる

いかゝへ弁の四郎より相のくゝめよ居くゝ彼宮はゆひなんへ
けく金百疋とその母よりておくまり母うしとあやゝしてそれの
相ゝるゆうふこゝさなりうどうの銭あるべしいあてうハ
えつゝくゝひろれば櫻よくゝそぐさやゝなくてそのゝゝとゆうの母の
いくゝ出いりといさびたくゝていやゝゝとゆうゆとさびゆこゝとに
ゝていつゝとをこうびぎあゝざるゆふよこゝびぎあゝざる
地蔵よいまびゝゝゆなとゝゆ一すぐゝてんとゝゝちとあひふ
ふ地なりそれ人のたゝてあるにけふゆうハ粗みゝて又う
けうふゆうゝごやゝいう君大宮よりとさて原孫とゆうまりん
とさゝあ月とゝしたい信ゝてあざしゝび君のゝあゝ命とたてゝ

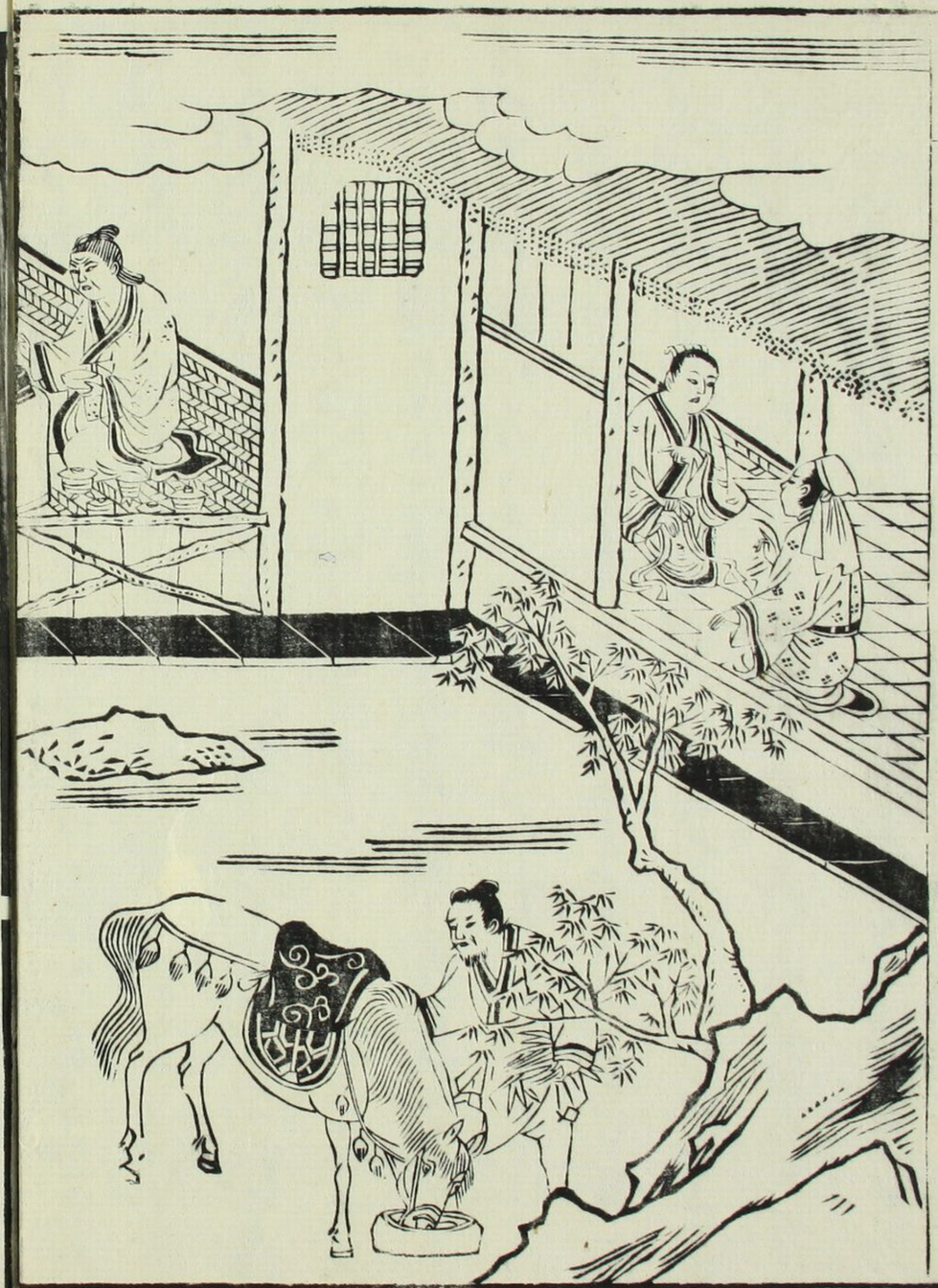
けうわゝび月いゝれゝておかやをゝゆゝくゝにおりてうまへ
かうゝべゝとゝいゆゝそれのんゝざゝゆゝさゝくゝれゝよそゝひゝゝそゆゝゝ
とゝとゝざゝうまゝうそれ人のたゝくゝゝてふゝわゝなゝうゝれ人のゆゝゝてふ巻
ゝうなゝうふ義ゝ賊ゝゝゝび地ゝよゝわゝゝびふ巻のゆゝいゝゝうゝゆゝにゝわゝゝび
ゝやゝゝゝゆゝゝゝゝうゝれゝハ櫻よゝゝとゝやゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝひ
てゝうゝゝそゝゝゝゝくゝ金ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬるとなれどぬぐしくてさてうひくてとつぎあるあるいとに
消息なりしやをもて賊とこそる物のゆきうくと若年なる
ものわるいはしさ消息なしでんりしるり と我さてうくる
きゆとめで云つりひとつ釈風のつくあるる人又母ゆりへ物
とうりやもだぐうるこうでうりうたその為りるうとうびた
まうく俸禄のあるなれバそのとうしうなりしに
なるなるえりのをバ云物とぬとうになどやこうんを
うひその花とまぬうれとともむこうりんよこづかゆるうめ
やと玄瞬そのとへ我うをくうくしこ酒のりうれバいうだ
うきうまんなうつぬよ寧視よのがきうり西氏崔氏の母ふるを

ずうこうきうるるへなり世のつよれ人のあや物ふるるみあるとハ
たぐ巻ありとうひくその男とあぐ又祖とうぐめとさハ
ひとうあるとうぐをるゆあるとおそれぐうりのくためるハあと
うたゆくしれをへなるだ
晋の陶侃が母湛氏ハその文れ妻なりしぐ又おうりてのち家
酒ぐうりうれバ母うつひざうて物々とうるひ陶侃を
うり屋なひよりつ〇よのうあるよ酒うりてかうきなどこ
ゆくうるるをれバつのよ世のうつハ物となりうらなあるる時
花造しうハ人鄱陽うり陶侃をひきて秋ひとよやどうてれ
うるうるよるひさまてれうつべき孫なり言うへいううり

けるこゝろいとあらくなくて移やすきこゝろあるこゝろ
をこゝろいでゝうごくこゝろうてるゝこゝろ
ごゝろなりつゝとをそれ河と切なくてらくあつよりて
こゝ物ゝうりうきて酒さかなれと新もおうりくしばらくそゝ
うりてたゝきくしてその秋のまれ人とゝそゝてゝよけゝ
花筵ゝ上ゝとをて涙なりれ母ゝ海ゝよゝ母ゝ海ゝ
いとゝゝくゝゝゝ陶侃とゝゝゝすゝゝゝ陶侃ゝゝゝ
はゝりゝ川の河おゝなゝて魚ゝとゝやゝゝとゝまゝりゝゝゝけゝり
ゝゝの親ゝ魚のゝすゝゝゝゝゝ母のゝゝゝゝゝ母ゝの
ゝゝゝゝゝ

とき人くらべ髭海ひるゝこていまゝりかゝなあゝしこれ
こゝりとてのちやうゝまをとゆゝせりゝ又家の張釜張元
母の家氏二人のまをゝゝとゝへいを書ゝもゝゝゝをきり
あゝきゝりてあそゝ付へ母絶ゝにやめくゝ文をとゝなまつり
ゝゝ武ゝゝへいゝゝくゝわゝゝゝゆゝゝをゝ武ハゝゝゝ事の
ゝゝくゝあゝゝまゝゝゝひゝゝすゝけゝあゝゝゝひをせゝくやゝゝゝ
ゝゝけゝゝ武ゝ三人のまをゝゝなゝゝたゝくゝふゝゝ事をゝけ官
遠ゝゝゆゝゝゝゝゝ兄の張釜ゝゝゝゝゝゝゝ時辞のゝゝれゝあや
ゝゝゝゝゝゝゝ



とこのまあごりつるやうれしばらくとどまりたく為とおさまんと
しかるをたちまちにわりまゝ力のとゞまるよあるべきひまもなくて我
とふるこゝろをもたちまちにわかくやうやうさてこそ
南溢あるくらゐこそさうしうもこゝろにまかせてあて
やまびあるべきうくしてをもうまとぶれそのさまくはよ
たくして名をなのせよとこそ
家の陳義大夫陳荀義の宗ハ馮氏なりそのよ二人ながら
ふるたりさたりさまわざまりすゑのよ陳光濃ハうくしおさう
ハとまわくふゆ桑とうしあるが荊南の寺とりの任
そそうわ時母のまいまり母射面して荊南ハさう

なれたまふなりそれはまるさんしてくるまいりてこそ
のおらーけるぞこそひろしばあ光源とくのるにとらびたるゆさ
ふるぞまつる人光源がうめのうとくくうやまるのなく
ひつるとろしば母北方もこびとふやとうでいく忠義
あてをの妻とたりけりふそしの文をくをこのふこの妻に
あるどやをまるこるからどの人をすれ故ともなしに氏と
うたるまらびくまをたびてりのく妻一人の寵ものく
ほこーげるうひうむくあさまーさんふまとうの
まるしもしはうて光源とうろしど栄華の食魚袋北
まるうろしれ人の母くてあ代とーつるものゆらは

世のつひはさるおくゆるしたうーざるうしたるおるく
すぐるうるるうしたあーあるちふいなひまでいなくて
ぞあーるゆるしるるとこもそのとくよりてうるる人を
なるーるるあもあるうしでるの筆先ほるふまりてそのとれた
るーふるもおけひげるふるう
隋の鄭義の母崔氏のひとあなり業陽の鄭城の嫁
て義果とひめり鄭孫隋よたくく周人とたるひくうち
義ひとるして崔氏年るつるふこなるうしば又あるしてこと
人よあるもまくるるるうてるるひるふしるるるるひ
義果とのるるるる事なげるそいやーおはてるび嫁てのるるるび

人よりあつべきまるめいさるくなりぬるもどうしひとりてい
めりあとてんハ道よりあつべなりさんはそもくれよりあつべ
さんどかどうのあふようさてハ我毎とそぐ磐とうりてんざ
とあつはとべ礼をそしき道とすてんの給なれもうもひ
ゑまつせ一ゆ文せんさなくてぞやる若果ハ又ゆゆ死よ
うりて幸なとおさふうりんだ大将軍ふるさし縣のろよ封ぜ
らとねよ文曽郡のたるよのがされうり母異明の徳あり
てさらあでしくぬしなたるとうり改おもはくく
あさるるりしうハ若果うゑ事とうりうり時ハ母ふるしべ
物うゑようさて寧判義ようるへ度あうへふとうりて

うらしうひいとうりうづくく物うさうひなぐさあうりりん
とうりひのゆまあやふるうとすぐうりよあうだくしさゆあうぶ
世ありのくゆひさうづふるひうりもひひねとうりハ
でうりめり若果ちそんて家のまへよひまいいうりびげよ
ゆりくゆやうそおうさあぐうりさうでれうりハ我そんのうんざ
とうづひうりもあくびゆで山家よりくてあうなんうりうりを
まびるうりそいいふふうまびハ我山あよりあばうへしうりすぐさ
つうへの右勅の言るりくゆ事りさうくうりたうとゆりうるい
されうくたくくうりうりとそのがうさうとうりうり分とも
てゆようてうづつのよ命とたくうりいうりれそうのいふ

りて文のふぐしにげさほゆくもの人ふるまりかの孫ひなし
されどそれはいとれるさうの文よりふるまに我まこやもあれ
為とるまびあぐいとわこさぐりふくれもとなれること
なさゆへよそれはもそへよるつどして太伝の家はぐさに
ちえ入り移るべくやり人ふにりて我るぐいひもなくうれさ
面ろうこなくこそふおしもそれよなるさ人のふさこと書き出
うきまくもかでけるさ浮先ぐこてそのみりいまぐ童だら
なりものよ然はとびする侍よとうせまくらつもそれの月れ
いてせろおわりやそのおそれるくこりよりとあくそてろを
伊半ぐりいさそひとひわぐりて祓ひとあやまりるのあく

じ門よ家の風とおくてうさ伝とうなひおよ未よひさ
てうこそふかるべくやくてそれ世をさうん河伊のめいぐくありて
されそそろ人よりぐふくもんてえまくまぐうぐくとおりくる
ふうれるかりとう面くいひさらくろう家すでよ言りそれど母
るようこうつぐくて和くまでよつひど若果くうさ半よふひ
ゆ上びいまそれぐ西の侍よ対ぐ上伝ハ門の上よおり倭孫
よそうぐひてのそりぬそれよなるとうふ事そしもなどやけとあ
こそまくるうひくるよこくいくそれのハすでよおるびてやう
やくれのこうりのもくかぐとあり人ろ孫さうそおくそれ
孫ハよ元そ上の文太勅のれひくひなれバその月民れるぐ上と文

のゆるゝ中よりまゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

しらぎくの丈の高さをかくしてと高う所望とて拵ヘ

比賣鑑紀行巻一